

「あと1年」と言われても諦めなかったから今がある



症例が少なく「難治」とされるタイプのがんは厄介だ。

安河内さんはこの稀少難治がんを2度も経験し、

見事に克服して現役復帰を果たした。

彼女はどのようにこれらのがんと向き合い、困難を乗り越えたのだろうか。

安河内 眞美さん・古美術鑑定士

取材・文●吉田健城 撮影●向井渉

肝内胆管がんの疑いが浮上

安河内さんは自ら古美術店を経営するかたわら、96年からテレビ東京系の看板番組「開運!なんでも鑑定団」の鑑定士を務め、今やお茶の間でも人気の存在となった。スタジオに持ち込まれた「自慢のお宝」の真贋を見極める眼はクールで理知的。経験に裏打ちされた自信が漂う。その安河内さんが2度、「なんでも鑑定団」の鑑定士席から姿を消したことがあるのをご存知だろうか？

2度の長期欠席は、どちらもがんとの戦いだった。それも、症例が少なく、難治とされる厄介ながんと向き合っていたのだ。最初は肝内胆管がん（胆管細胞がん）だった。告知を受けたのは1999年のことである。「自覚症状としては食欲不振だけでした。直前にバリ島に旅行していて、帰国直後から食欲がなくなってしまう、1週間ほど何も食べる気にならなかったんです。バリで何かに感染したのかと思います、都心の総合病院に行きましたが、そこでエコーやCTなどの検査を受けても、始め

は原因がわかりませんでした。入院して詳しく検査し、初めて肝内胆管がんの疑いがあるとわかったんです。告知され、医師に「手術の必要があるので、

(その病院の) 外科医と話をしてください」と言われましたが、それには従いませんでした。私自身、その病院にピンとこなかったのもありますが、先生本人が病気のことをちゃんと判っている感じではなく、東大の先生と話してどうやら肝内胆管がんらしい……という心もなない診断で。だから別の病院でセカンドオピニオンを取ることになったんです」

安河内さんはその病院で検査資料を出してもらい、都内のがん専門病院を訪ねた。

肝内胆管がんは、肝臓を原発とするがんの1つだ。わが国では肝臓を原発とするがんの患者が年間約3万人ほど生まれているが、肝内胆管がんはその3、5パーセント程度。つまり1年間に生まれる患者数は900、1500人程度ということになる。

患者数が少ないと、通常はがん医療に実績のある大学病院で

も10年間に経験する症例は数例から10数例程度になってしまうのだ。

ベストに導いてくれた友人

セカンドオピニオンで訪れたがん専門病院でも、肝内胆管がんだろうという診断だった。

担当医師は、肝内胆管がんが判定の難しいがんであること、日本では症例の少ないがんで高齢の男性に多いこと、治療の難しいがんで根治を目指すには手術で切除するしかないこと、そして、予後の悪いがんで治療切除が行われた場合でもリンパ節転移を起こしやすいため高い割合で再発のリスクがあることなどを説明した。

「説明は十分時間を取ってしてくださったのですが、この先生にお任せしようと思えなかったのは、説明が事務的で人間味が感じられなかったことが1つ。それと肝内胆管がんであるかどうかについても、その疑いが強いというだけで、『直接、皮膚の上から胆管に針を刺して組織を取り出して調べれば確定的なことが言えるが、それをするのが細胞が飛び散る可能性があるから勧められない』という説明。じゃあどうすればいいの? と思ってしまう……」

もし彼女が1人で医師の説明を受けていたら、ショックで冷静な判断ができず、思い悩んで立ち往生していたかもしれない。しかし、そうはならなかった。

ベストの方向に背中を押してくる人がいたのだ。安河内さんの長年の友人で、アメリカ人女性だった。

「最初の病院で肝内胆管がんらしいと言われた後、親しくしているアメリカ人夫婦にすべてを話しました。2人ともすごく心配してくれて、奥さんのほうがセカンドオピニオンを受けるとき一緒に行ってくれることになったんです。彼女はニューヨーク育ちで、自分の家族もがんを患った経験があり、他人事ではなかったのだと思います。一緒にがん専門病院で話を聞いたとき、『日本には少ないがんで……』という医師の言葉に、彼女は日本には肝内胆管がんを治せる経験豊富な医師がいないと感じたんです。どこかにいい医師がいるはずだと、外国を探してくれました」

ニューヨークから名古屋へ

その友人がインターネット情報や友人たちの情報から辿り着いたのは、米国メモリアル・スローン・ケタリングがんセンターのレスリー・ブルームガート博士だった。ニューヨークにある同がんセンターは、ヒューストンのMDアンダーソンがんセンターとともに世界の頂点に立つがん医療機関で、ブルームガート博士はその肝臓科部門の主任を務める世界的権威だ。

その友人は、ブルームガート博士にコンタクトを取って安河内さんの検査画像を送り、さらに国際電話で直接電話で話をする段取りまでつけてくれた。

「ブルームガート先生からいただいたアドバイスは明快で、『肝内胆管がんは、僕もベストだけど、ナゴヤユニバーシティ・ホスピタルのドクター・ニムラもそうだから、彼に診てもらおうのがいい』というものでした。そこで、すぐに名古屋大学病院の二村先生の診察を受けるため、その友人に付き添われて名古屋に行きました」

二村雄次医師は、困難な手術



栃木に住む農業を営む友人が、安河内さんが白血病になったことを知り、ビニールハウス1棟を「眞美ちゃんハウス」と名付け、そこで育てられたトマトやイチゴを送り続けてくれている。

を伴うことの多い胆道がん（胆管がん、胆嚢がん）の外科治療においてパイオニア的役割を果たした外科医で、同医師のチームは胆管がん、肝門部胆管がん、肝内胆管がんの外科手術では、症例だけでなく、手術の難易度、手術成績で世界をリードする実績をあげていた。

「二村先生は気さくな方で、多くの症例を診てきたゆえの余裕のようなものが感じられました。話していて人間味と温かさを感じ、迷うことなく名大病院で手術を受けることにしました。入院したのは1999年6月で、手術では肝臓を半分と胆管の大

半を切除しました。抗がん剤はしていません。幸いだったのは、開腹してみたら、がんのタイプが浸潤性でなくて、ポロッと取れるタイプ（腫瘍形成型）だったことです。このタイプは治療成績が悪いといわれる肝内胆管がんの中では比較的タチのいいタイプだそうです。でもいちばんホッとしたのは、リンパ節に転移していなかったことです」

退院後の経過は順調だった。手術で肝臓を半分切除したが、なくなった部分はほとんど再生された。始めのうちは月に1度、検査に通ったが、再発の兆候は見られず、そのうち検査は3カ月に1度になり、半年に1度になった。

復帰後は「鑑定団」の出演が不定期からレギュラーになったこともあり、仕事は以前に増して忙しくなり、病気のことを気にする間もないまま3年、4年と過ぎていった。

九州に多い特殊な白血病

そんなある日、安河内さんは首のリンパ節の腫れに気付いた。しかし、風邪を引いてもリンパは腫れると思い、定期検査日が

迫っていたこともあり、しばらく放っておいた。翌月の検査で対応した医師は、検査結果を見て顔色を変えた。

「すぐ耳鼻咽喉科に行くように」と。そこで再発でないことはわかりましたが、血液検査をしても原因がわからなくて。最終的に血液内科に回され、ここで先生に「あなたは九州出身？」と聞かれ、「はい」と答えたら、ああやっぱり……となったんです。これはATL（成人T細胞性白血病）という種類の白血病で、九州に突出して多い特殊な白血病だと告げられました」

ATLは、母体などを通じてHTLV-1（ヒトT細胞白血病ウイルス）というレトロウイルスに感染しキャリアになった人のうち、ごく一部が40～60年という長い歳月を経て発症する特殊な白血病だ。日本にはHTLV-1のキャリアが120万人前後いると推定されているが、毎年新たに生まれる患者数は600人前後と極めて少ない。特徴は九州に突出して多いことで患者の7割は九州出身者で占められる。

ATLの厄介な点は、症例が

極めて少ないうえ、病気が発見されてまだ30年ほどしか経っていないため、有効な治療法が開発され始めたばかりの段階にあることだ。そのため豊富な症例と治療実績をもつ医療機関はごく限られた数しかない。

「ATLという病名を告知された後、これがどういう病気か、どのような治療法があるかについても説明があったんですが、何よりもショックだったのは『有効な治療法は抗がん剤だけで、その抗がん剤を使って治療しても平均生存期間は1年以内です』とはっきり言われたことでした。そのときの心境ですか？ ああいうときって、すぐに反応できないものですね。ふうん、という感じ。治療法は抗がん剤だけといわれたので、副作用について聞いた記憶があります。でも帰宅した途端、『1年以内の命』と言われたことが現実味を持ち始め、涙が止まらなくなりました」

友人が見つけた鹿児島病の病院

このときも、ショックが癒えぬ安河内さんの背中を押して正しい方向に進ませてくれたのは



白血病を克服し「開運」なんでも鑑定団」に復帰したばかりの頃。中央が安河内さん。
北原昭久氏（右）、阿部芳樹氏（左）とともに

友人だった。

「ATLと告げられたとき、前回は別の友人と一緒に話してきてくれたんです。彼女は診察室には入らなかったけど、私がどんなことを言われたかを話したら、即座に「あきらめてはダメ」と勇気付けてくれ、インターネットなどでATLの治療で実績のある病院を探してく

れました」

その友人が探し出してくれたのは鹿児島にある今村病院分院だった。さっそく鹿児島に飛んで同病院を訪ねると、ATLの治療で顕著な実績をあげている血液内科の宇都宮医師が対応してくれました。

宇都宮医師は安河内さんから詳しい話を聞くと、もっとも有効な治療法は骨髓移植（造血幹細胞移植）であり、最近はいくつかの少ないミニ移植の研究が進んでいること、移植を受ける場合は長期入院することになるので家族の助けが不可欠であること、骨髓移植には兄弟姉妹にHLA型が一致する人がいる可能性が高いことなどを説明してくれた。その上で北九州市に家族がいることを考慮し、ATL治療で今村病院と遜色ない治療実績をあげている福岡の九州がんセンターで治療を受けることを勧めたという。

う手配してくれ、さらに、九州がんセンターにも連絡を入れて入院の手配もしてくれた。この宇都宮医師の骨折りがあったおかげで、それからことが順調に運び、安河内さんは05年6月8日に九州がんセンターに入院することになった。

同がんセンターで、安河内さんは血液内科部長の嶋池直邦医師の診察を受け、同医師と相談してミニ移植という移植法を選択。それ以降は前述の宇都宮医師らとATL患者へのミニ移植の研究に取り組んでいる若い医師が直接の担当になった。

村病院などの医師によって進められており、フル移植と遜色ない治療成績が出るようになってきている、という。

兄とHLA型が完全一致

ただミニ移植という選択をしても、肝心のドナーが見つからないと治療には入れない。この点でも安河内さんは幸運だった。「私は知らされていなかったのですが、九州がんセンターでは、まず骨髓バンク登録者を当たったのです。けれど、完全一致はおろか、1座不一致もいかなかったらしいのです。先生はそのことは私に伏せて、私のきょうだいを調べてくれました。私は4人きょうだいで姉が2人、兄が1人いるのですが、調べたら兄が完全一致したのです」

ドナーが見つかった後、安河内さんは骨髓移植の前処置となる抗がん剤治療に入った。

「1週間続けて点滴投与し2週間休むというパターンを5クールしましたが、強い副作用に苦しむことはありませんでした。いちばん気になったのは、筋肉が落ちてやせこけてしまったことですね。髪の毛が抜けたこと